

## 矯正治療の限界と連携歯科医療の実際

与五沢 文夫

昨年の **Interdisciplinary dentistry**（連携歯科医療）の講演では、連携歯科医療を実行するための仕組み、すなわち社会的背景について考察を加え、さらに連携歯科医療の具体的な形を臨床結果によって示した。

今回は、～補綴専門医が矯正治療に望むこと・矯正専門医の限界と連携歯科医療の実際～というタイトルで、連携歯科医療の具体的な内容となっている。そこで私自身のこれまでの経験から、相互の理解を深め連携をスムーズに行うための目的で、矯正医の立場から矯正治療の特性と限界、ならびに現状を述べてみたい。

それらの連携歯科医療の技術的な面とは別に、現在の私自身にとっての連携歯科医療の最大の関心事は、我が国において、どの程度に連携が行われているか、連携歯科医療が果たして発展的に推移しているのか、にある。矯正単科専門開業医は矯正臨床に特化して歯科医療を行っているので、連携医療なしに医業として成立しない。現在、地域によっては矯正医が矯正医としての体をなさない状況が現実にある。矯正臨床が安易な形で広範に蔓延した結果、矯正専門医を目指したはずの者が長年を費やして培った特殊な知識や技術、経験を生かすきれない現実に直面して、矯正医が歯牙を削り、場合によってはインプラントまで行うようになってきている現状を見るにつけ、医療の細分化や専門医制度から逆行している傾向にあると言わざるを得ない。連携歯科医療は複数の歯科医が歯科医療の部分をそれぞれに担当することによって、総合的に高度で安全な医療を行うための仕組みであるから、それぞれの領域を担う専門医が必要である。歯科領域においてもすでにいくつかの専門医は誕生しているが、専門医とは何か、何のための専門医か、なぜ専門医が必要なのか、歯科医の将来も含めもう一度根底から考えて頂きたいと心から願うものである。今回のメインテーマ「専門医のシンポジウム」に期待したい。

与五沢 文夫（よごさわ ふみお）先生

よごさわ歯科矯正 院長